



インタビュー 山田 貢先生

チェンバロに魅せられて

第39回〈東音〉ピアノゼミナールは、ピアノのお母さんともいえるチェンバロのことについて、バッハのインベンションなど、チェンバロ・オリジナル曲を通じて、山田貢先生をお迎えして御指導していただくことになった。

そこで、1月のある日、日本のチェンバリストの第一人者である山田貢先生のお宅をお訪した。

—— 先日のバロック協会の演奏会、どうもおめでとうございました。全ステージ、チェンバロがはいって山田先生は大変でございましたね。

さて、早速ですが、先生のお育ちになった環境からお話いただけますか。

山田 貢 父は音楽の教師、そして教会のオルガニストをしてましたから、その演奏やレコードをきくことで音楽的雰囲気はありました。お弟子もっておりましたが、私には全然教えてくれませんでした。

家にあったピアノやオルガンに自然に親しみ、門前の小僧なんかで、ピアノを弾くようになったのですね。

母は、幼稚園の園長をしています。兄弟は3人、弟は国立音大卒で教師をしています。妹は音楽を専攻しませんでした。これがこちらより耳がよくて私がひいている曲をいつのまにか覚えているんです。

—— 先生は芸大の楽理科を受験されたわけですが、どんなお勉強をなされましたか。この小誌を読んでいらっしゃる方の中には、受験生もいらっしゃいますので、先生の受験時代についてちょっとお話を聞かせませんか
山田 そうですね。ピアノは豊増 昇先生に師事していました。一般的にいうと楽理科の場合、語学の力に相当ウェイトがおかれるのです。自分で好きで英文は乱読しておりましたが、専門語とか音楽史的な物の見方等で仕込んで頂くため服部幸三先生のお宅に通いました。

私は、ピアノも勉強できるし、音楽の学問的な勉強もできるということで楽理科を選んだわけですが。

—— それから、大学にはいられて何を専攻されたのですか。

山田 芸大へ入ってもピアノばかりひいていたように思えます。現代曲かバッハでなければ興味がなく川上きよ先生にお願いして試験曲以外はバッハにして頂き、平均律を一貫してやりました。あの頃は実際とつかれた者のようで、一週に一曲いわるピアノスティックな解釈でなく仕上げる征服欲にかられていました。

先生はグレゴリアンチャントに造詣深く私の風変わりなバッハ解釈に沢山の意見をおっしゃって下さり、常に対話があり楽しい思い出です。考えてみると、グレン・グールドみたいな方向を探っていたといえます。他声を極めて弱めてテーマを浮き出させたり、ノンレガートの強調だとか……そんなことで鍵盤楽器の歴史、演奏法の歴史など興味があったので、卒業論文は17・8世紀の演奏スタイルについて研究することになりました。

—— 現在の演奏スタイルと大部違いますか。

山田 はあ、現在のは19世紀以後のピアノからくる演奏スタイルですが、17・8世紀の演奏スタイルは、特に対位法、そして当時の鍵盤楽器が母体となるのです。

—— それで、先生はチェンバロを御研究なされたわけなのですね。このチェンバロと昔のチェンバロと型は変わらないのですか。(注 先生のお宅のチェンバロは、二段鍵盤、ペダル鍵盤もついている。それを指しながら)
山田 ええ、昔の大きさと同じだと思います。長さ2メートル50cm。

—— ピアノでいうと、セミコン位の大きさがあるのですね。この下のペダルは何ですか。

山田 下にも弦が張られおりまして、このペダルにより足で演奏するわけです。これはペダルチェンバロといわれているもので、昔はオルガニストが練習のために使ったといわれています。

ここごらん下さい。(注 ペダルチェンバロの中を見せてください。)

手鍵盤のジャックとくらべてずいぶん大きいでしょう。

—— うあ、相当大きいですね。じゃ、チェンバロというのは、オルガンと同じように、手と足と両方で弾くのですか。

山田 いえ、この楽器は、特殊です。バッハがこういう組み合わせのものを二、三台持っていたという記述はあります。

—— ところで、おいくら位でチェンバロは求められ

るものですか。

山田 チェンバロといってもいろいろのサイズがあり、またメーカーによっても違います。一段鍵盤のものや、スピネットは安いのがあります。私は留学中に買って持ち帰りました。親に頼むからあのピアノを売って送金してくれと何度も書いたので、お前はピアノを何台もっていたんだネと今でも語り草です。

—— むこうで買うと税金がつかないのでしょうか。

山田 ええ、あちらで、1年以上滞在し勉強していた場合は、引越し荷物として持ってこられるのです。

むこうでの値段は、二段鍵盤で2m以上のもので80万円から150万位です。

ここでちょっと申し上げたいのですが、一般にチェンバロは非常に高いので手が出ない、というようなイメージがあるのではないのでしょうか。そんなに高価なものではないということを申し上げておきたいのです。

—— 日本では製作されていますか。

山田 はい。百瀬、堀、それから浜松の郡司さん。百瀬さんはやがて20年の実績がありますが、本格的な音作りは外国に比べたらこれからです。

—— では日本でのチェンバロは歴史が浅いわけですね。先生がチェンバロを弾き始められたのは、芸大にいらした時ですか。

山田 いえ、私が芸大に通っていた時には、芸大にもチェンバロがなかったのですよ。

チェンバロを實際弾くということよりも、外側からじわじわと勉強していて、そして演奏にはいっていたのです。

ここでちょっとおもしろい話があるのです。私が大学を卒業する間ぎわに、芸大にもチェンバロがはいったのです。そこで私チェンバロが弾きたくて、教務に行きましてね、留年させてくれとたのんだんです。そしたら今迄に、単位が足りなくて卒業できない学生が、どうにか卒業させてくれとたのみに来たことはあっても、留年させてくれとたのみに来た者は初めてだっていわれましてね。とうとう学校出されてしまいました。

—— 大学にチェンバロがなかったようでは、チェンバロの奏法など指導してくださる先生は、勿論いらっしゃらなかったわけですね。

山田 ええ、いらっしゃいませんでした。

—— そこで、外国へいらっしゃるということになったのですね。

山田 はあ、私本当は指揮科に転科したかったのですが、芸大の機構上、学士号を持った者は無理だということで、指揮科には進まず家で勉強していたのです。

そうしたら留学のチャンスが、以外に早く訪れまして、9月にオーストリーの給費生の試験を受けたら合格

して、ウィーン・アカデミーに入学したのです。

—— 給費生の試験は大変むずかしいと聞きますが、先生は一回で合格なされたのですから、相当、語学力についても実力がおありだったわけですね。

ところで、どの位の費用が援助されるのですか。飛行機代はでないのでしょうか。

山田 はあ、飛行機代は、今も10年前もそう変わってなくて、ヨーロッパ往復48万円。これは、自己負担です。

むこうでの授業料免除と生活費、基本的な費用をいただけるのです。

—— お小使はでないのですか。

山田 とてもお小使いまで、できません。だから日本から仕送りがあったのですけれど、当時、なかなか日本からお金が送れなくて、ドイツから日本に来た方の日本での滞在費と交換したり、父、母、祖母、弟などと、名を変えて送ったりして、まあ、私は送ってもらう方で陽気でしたが、その苦労は大変だった様です。

—— ウィーン・アカデミーの御様子をお聞かせください。

山田 いわゆるコンセルヴァトワールの方式です。高校を出ていないといけないとか、そんな年齢制限はあまりありませんね。音楽技術がある一定のレベルまで達していれば、それで入学できるわけなのですが、はいるということよりも、出る(卒業)ということの方に重点がおかれていますね。

門戸は広いのですけれど。

—— フランスのコンセルヴァトワールと同じですね。日本は、芸大にはいるなんて、とても大変で、受験生の方は、そりゃ必死で勉強していますね。芸大を卒業したからといって、何のことはないようですけれど。

山田 そりゃ、ウィーン・アカデミーでも同じですよ。卒業するのは、相当むずかしいですけれど、卒業したからといって、どうということはないですよ。芸術の世界は、そういうものではないですか。

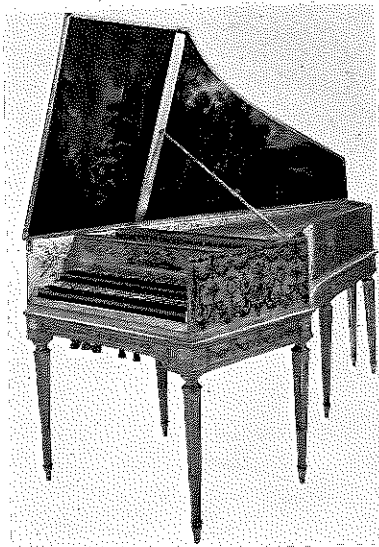
卒業した人みんなが、巨匠になったら大変ですもの。

—— そりゃ、そうですね。そこで先生は3ヶ年勉強されていたわけですが、一番最初にはいられたのは、チェンバロ科ですか。

山田 そうです。むこうでは、同時にいろいろな科で勉強できるシステムなんです。だから、指揮科にも勿論籍をおきました。

—— チェンバロの先生のお名は

山田 イゾルデ・アールグリムです。音楽一筋、大変エレガントな婦人です。あけてもくれても「Langsam üben (ゆっくりさらいなさい)」、「最適の指づかいをえらび出しなさい」と大変厳しい教え方でした。本当のレガート奏法の何たるかを教えられました。「あっ又ピアノをやっ



てる」の声もいまでも頭についてますネ家にいらっしゃらなければ国立図書館といった具合で原典研究の情熱に、全く頭が下ります。

何しろチェンバロの音楽の歴史はピアノのそれより一世紀は長いので、時代別のスタイルの適格な把握と

いうものが重要です。

楽理科を出てよかったと思うのもこういう時でした。芸大の時やっていたピアノの点描画的な扱い方もチェンバロを深めるにつけ思い出されましたが、今度は楽器の方がそれを打ち消してレガートを要求してくるんです。

—— ところで、2月15日(月)のゼミナールは、チェンバロと言葉という主題で、御指導いただくわけなんですけれど、チェンバロについて簡単に教えていただきたいと思えます。

まず、チェンバロが生まれたのはいつ頃なのですか。

山田 15世紀には存在していたという文献があります。現存している一番古いチェンバロは、1514年(16世紀初め)の作で、イタリア製のものなんですけれど、今、イギリスのビクトリア・アンド・アルバートミュージアムにあります。

—— 先生も御覧になられたのですか。

山田 ええとくと……外側は皮張りで、細かなアラベスクが打ち込んであるのです。中は薄い木できています

まあ、チェンバロは、ハーブとかハンガリアの民族楽器のチェンバルン、絃が横に張られていて、パチで叩いて音を出す楽器なんですけど、これに鍵盤がついてきたものですね。即ち絃をはじいて音を出すということで、ピアノのように絃を叩いて音を出すのと根本的に違うわけですね。

同じ絃を同じ箱に同じ張力ではって、はじいた場合と叩いた場合とでは、どちらが大きい音がでると思われますか。

—— そうですね、感覚的に申しますと、はじいた方が大きい音がでるように思えますが。

山田 そうですね。はじいた方が大きい音がでるのでね。それで、どんな小さな音にも敏感な箱を作って、そこに絃を張り、はじいたら良い音が出るということを音の人の知恵で知っていたのですね。

これを叩いたら、もかあとしてしまうということ。チェンバロからピアノまでの歴史というのは、チェンバロは、はじいて音を出す。これをいろいろな音色を作って、二段鍵盤を作り、三段鍵盤を作りと、それをストップで組み合わせていって、ミックスされた音を出していったわけです。

ところが、それにも満足しなくなって、一つの鍵盤で音の強弱を出したいと考えてきたのです。そこでピアノが生まれたのです。

初期のピアノを見ますと、チェンバロの箱を使っているのです。

—— モーツァルト・フリューゲルなんかそうですか。

山田 ええ、あれは本当にやさしい音がでますよね。

—— 当然、奏法においても現在と違っているわけですね。

山田 そうですね。昔は、チェンバロという楽器は、国によっても違ったので、それぞれの国で、その楽器にあった曲を、作曲家達は作っているわけです。

(昔のいろいろな楽譜を見せてくださる)

—— うあ、こんな時代にこんなむずかしい曲を弾いたのですか。記譜法の歴史、奏法の歴史 が、チェンバロの楽譜を見ればわかるようなものですね。

山田 そうですね。昔はあまり親指を使わなかったので、2・3・2・3とスケールを弾いたりしていますね。

親指をあまり使わなかったということは、楽器の構造からさていることなのです。親指を使うということは、他の指をアーチ型にするということですね。

鍵盤は、見えるところと奥にかくれているところとシーソーになっているわけなんですけれど、この鍵盤の見えない部分もいれての奥行きが、今のとでは、昔のはずいぶん短かったのです。

それで、テコの原理ではなるべく手前を弾いた方がよいわけで、親指を入れて弾くとどうしても奥を弾くようになりますね。それでなるべく親指を弾かないようにしたわけなのです。バッハ以前の親指の使用うんぬんの話が長くなりますが、多少テコをピアノ的に長くした現在のチェンバロでも親指の適応は常に問題があり、アールグリム先生もシャープ・キー(チェンバロでは黒鍵でなく白鍵)にはなるべく親指をさけるよういってました。

—— チェンバロの調律を出来る人は少いのでしょうか。

山田 ええ、チェンバロの調律は、自分でするのでですよ。リュートという楽器がありますね。(注 ギターに似

た弦楽器)昔の人が「リュート弾きが、60才であったとしたら、その内の40年は、調弦していたであろう」といった位、調弦ということが大変なのです。

この言葉は、チェンバロ弾きにもいえることで、弾いている時間もさることながら、調弦したり、ツメの手入れをしたりしている時間が、とても馬鹿にならないのです。

(注 厚い皮でツメを作るのを見せて下さる)

—— 大変なものですね。皮で弦をはじいているというわけですね。

さて、先生は、チェンバリストとして日本での第一人者。各方面で演奏活動をしていらっしゃるわけですが、今後の御子定などお伺いさせていただきます。

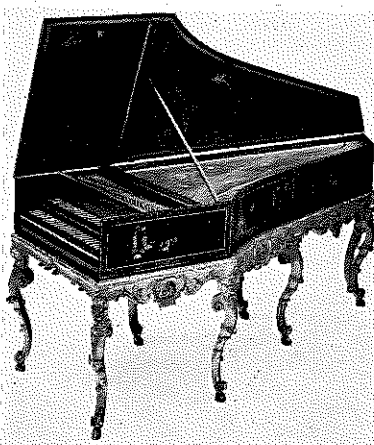
山田 この12日、13日にフレスコバルディやブクフテフェーデを中心としたプロでイタリアンチェンバロでひきます。そして3月はじめにバッハプロ、バッハの息子たちの協奏曲の会などが控えています。秋には念願のタスカン(フランスのチェンバロ製作史上頂点に位する人)の

コピーを弾けるんじゃないかと思うのでそれでアンサンブルやソロをしたいです

—— 先生いろいろどうも有難うございました。最近チェンバロ・ファンが大部増えて来た

のも、先生の御力に預ることが多いと思います。

では、2月15日を楽しみに致しております。



プログラム

第39回〈東音〉ピアノゼミナール

山田 貢 公開レッスン

主 題 チェンバロと言葉
日 時 2月15日(月) P.M. 6:30
会 場 渋谷カワイサロン
曲 目 バッハ/フリーデマン バッハの為の小前奏曲集 全7曲
 バッハ/インベンション 2声 ニ長調 ヘ短調 ト短調
受講者 恒益路得子
 平林真理江 他

〈東音〉ピアノ指導部 研究生 募集

- 資 格 音大2年終了程度の実力を有する方、年齢は問わず
- 人 員 1クラス 10名
- 特 典 2ヶ年在籍された方は、全日本ピアノ指導者協会正会員として登録され、日本国内は勿論のこと、アメリカにもピアノ指導者スペシャリストとして紹介されます。
- 研究内容 バッハから現代までのピアノ曲、奏法、指導法など、個人レッスンを含む。
- 毎週1回 木曜日の午前中 月曜日の夜間
- 授業料 1ヶ年 48,000円 入会金 10,000円

くわしいことは、下記へお問い合わせください。

東京都豊島区巢鴨1-38-7 東音企画内(944)1581(代)